

インタビュー：服と向き合う——POTTO と mame の場合

POTTO デザイナー 山本哲也

mame デザイナー 黒河内真衣子

INTERVIEW: FACING OUR OWN WORKS: POTTO AND MAME

Tetsuya YAMAMOTO, Designer

Maiko KUROGOUCHI, Designer

In recent years even young designers have been increasingly trying in various ways to establish relationships with consumers and manufacturers from a long-term viewpoint, keeping their distance from existing fashion systems — including imbalanced relationships between manufacturing and consumption such as fashion shows with exceeding images and fast fashions. In view of future relationships between people and clothing, these endeavors by young designers are thought-provoking in terms of future fashions. Among them two designers who have been engaged in unique activities, Tetsuya Yamamoto of *POTTO* and Maiko Kurogouchi of *mame*, describe their stances on creating clothes.

長いキャリアを持つヨーガン レールの姿勢には、風合いや着心地に対するこだわり、そして環境への最大限の配慮がある。それは表層的なものでも一過性のものでもなく、デザイナー自身が責務と考えていることであり、日々の生活において実践していることでもある。

若手デザイナーにおいても、近年、さまざまな形で既存のファッション・システム——イメージ先行のファッション・ショーやファスト・ファッションに代表される生産・消費のアンバランスな関係など——から距離を置き、長期的な視点で消費者や生産者との関係を築いていこうとするデザイナーが増えつつある。これからの人と服との関係を考えるうえで、そうした彼らの試みは、今後のファッションにとって多くの示唆に富んでいる。その中でも特徴ある活動を見せる二人、「POTTO」の山本哲也と「mame」の黒河内真衣子が服作りの姿勢について語った。

山本は 2001 年に初コレクションを発表。ぬいぐるみや人の顔、動植物のイラスト、絵画、さらには筆記体で書いた人の名前など、通常の衣服制作では取り上げることのないフォルムを持ったものをデザインの出発点にする。自分の思い描く衣服のフォルムを具現化

するためにパターンを引き、生地を裁断するのではなく、山本は、すでに作られた^{パターン}型から服のフォルムを構築していこうとする。

黒河内は2010年に自身のブランドを立ち上げたばかりであるが、自ら各地の産地を巡って高品質な素材を探し、高い技術を持った工房と共に制作を行っている。触れた時の風合い、袖を通した時の着心地、羽織った時に完成されるフォルム、そのどれもが細部にわたって考えられた質の高い作品を毎シーズン発表している。

衣服デザインに対するアプローチの仕方は違うが、皆、それぞれの方法でもって服と真摯に向き合っている。

山本哲也／POTTO

KCI：ブランドを立ち上げられたのが2001年ですね。

山本：2001年、ということにしているのですが、この時にブランドを始めます、という区切りはなくて、それまでは自分のできる範囲で作っていました。

KCI：服を作るきっかけ、デザイナーになろうと思ったきっかけにはどういうことがあったのでしょうか。

山本：小学校5、6年の頃からファッション雑誌を見たり、服を着るのが好きでした。高校卒業後に服を作っている友達と遊ぶようになって、自分も真似してTシャツとか作り始めたんです。「これだったらずっとできるな」と思い、東京に出て文化服装学院に入ったのがきっかけです。

在学中はマルタン・マルジェラやヴィヴィアン・ウェストウッドが好きでした。単純に自分が着たいとか、いいなと思うものを作っていただけで、コンセプトを決めたりはしていませんでした。

卒業して一旦はアパレルメーカーにデザイナーで就職したのですが、「これをやっていてもしょうがないな」と思って半年で辞めてしまいました。それからは、アパレル関係のバイトをしながら自分でたまに服を作る、というのを続けていて、2001年に初めてショーをしました。元々、ぬいぐるみが好きでたくさん持っていたのですが、そのぬいぐるみをバラバラにして、カステルバジャックみたいにつなぎ合わせて服を作りました。ふわふわしたぬいぐるみを毛皮に見立ててコートやストールにしました。ぬいぐるみを選んだのは、マイク・ケリーの影響も大きいです。彼は、「自分のぬいぐるみの作品に皆がいろいろ想像して意味付けしていくのが面白くて、ぬいぐるみを思わせる作品を続けて発表していた」というような発言をしていました。他にも「Destroy All Monsters」というバンドを組んで

ライブをしたり、ポール・マッカートニーとパフォーマンスしたり。僕の中では、ファッションも音楽もアートも料理も日曜大工も区別なく存在しているので、彼のような多彩な活動をする人たちが好きです。先日亡くなってしまったのが寂しいです。

KCI：ぬいぐるみはその後のコレクションでもテーマに取り上げていますよね。山本さんの服作りで非常に面白いと感じるところは、通常のファッション・デザインとは違うところから敢えて出発している点です。一般的には最初にデザイン画を描いて、それをもとにパターンを起こして、という手順になるのですが、山本さんの場合、ぬいぐるみから起こした型紙を組み合わせて服にしたり、ナスカの地上絵や動植物の図像の輪郭をそのまま服のシルエットに落とし込んだり、服とはかけ離れたものから始めています。最初に何らかの制限をかけているように思います。

山本：自分で考えて作ると、どうしても好きなものに偏ってしまうような気がして……。これまでテーマとして取り上げてきた、ぬいぐるみや人名の綴り、ナスカの地上絵、人の顔などは、元々、服にする前から形を持って存在しているものです。そこに一人一人が愛おしさや大切に思う気持ちを込めていく中で、デザインとして際立っていく。デザイナーによって提案されたその時のおしゃれなものを選ぶということとは、違う形で現れたデザインだと思うんです。そうした自分では想像つかない部分に大きな可能性の幅があると思っています。

KCI：最近のデザイナーは、すべてをコントロールしようとは考えない人が多いですね。服のデザインやブランドの立ち位置においても、自分が考えるイメージに合わせたり押しつけたりしない。たとえそこから外れたとしても、「これもあり」と受け入れることができる。デザインの決定やイメージの醸成を偶然性や第三者に委ねる部分が大きいというか……。

山本：それはあるかもしれません。かつてのように何から何までがちがちに決めつけるやり方には抵抗があります。それが良かった時代もありますが、僕たちは、それってどうかなって感じながら育ってきた世代でもあります。それに、今までのファッションには、選別したり他と差別化したりすることによって成立する部分が多分にあって、それをできる限り減らしたいという気持ちもあります。

《絵になる服》のコレクションも、そうした〈洋服〉に感じる不自由さへの自分なりのリアクションです。服は人が着ることで服になる、と思うのですが、「着なくてもよい服」があってもいいんじゃないか、そんな服があればどういうものか、という考えが出发点です。絵は別に着なくてもいい。それなら絵から服を作ろうかな、という感じで始まりました。

服やファッションには、他者との差別化や自己の表現といった側面がありますが、それはやはり〈着る〉からこそ成り立つ。だからファッションはコミュニケーションだ、という人もいます。ですが、ファッションはもっと身近で個人的なものでもありますよね。中には寝たきりの人や外出できない人、服は好きだけど自分に自信がなくて着飾ろうとしない人もいます。そうした人たちも楽しめるファッションとは何かをどこかで考えているところはあります。

KCI：山本さんのおっしゃった「着る」という言葉は、「着こなす」という意味で考えると理解しやすいように思います。単なる一枚の布でも人は〈着る〉ことができますが、〈着こなす〉ているかどうかは着ている人ではない他者の判断が求められる。一般的にファッションは、そうした「着こなす」が問題になると思います。たとえ「自己表現の方法」として個性的な服を着る場合にも、自分以外の「誰か」が想定されている点では一緒です。山本さんは、そういった私と誰かの「コミュニケーション」のツールとなる服ではなく、「自分にとっての一着」のような存在として服をとらえようとしている。変な言い方かもしれませんが、着る人と服だけの閉じた関係を目指している。

そうした方向性を考えると、ぬいぐるみや絵画は多くの人々が共感できるテーマだったと思います。ぬいぐるみが好きな人は、かわいさを求めるだけでなく、癒しやぬくもり、愛着という点でぬいぐるみとつながっています。絵画にしても、部屋に飾って眺めるだけだけど幸せになる、という個人的体験ができる。そこには他人が入る隙がないような自分と対象だけの世界がある。山本さんは、そういった人とモノの親密な関係を服においても築き上げようとしているのではないのでしょうか。

山本：そうかもしれません。閉じることによって、すごく自由で広い世界が現れるんじゃないか、と思うことがよくあります。他人との関係も大切ですが、どこまでも自分の深部に下りていくことで、どこまでも世界が広がっていく。そこに本当に平和な関係ができあがるのかもしれない。

以前、そういうことをコレクションのコンセプトとして編集者の人に話していたら、「それはファッションのやることじゃなくて、宗教のやることよ」と言われて、「そうかな？別にファッションでもいいんじゃないかな」と思ったりしました。(笑)

KCI：昨年（2011年）6月に行われたプレゼンテーションで発表された服は、それまでとは大きく変わったという印象を持ちました。何かその間で考え方に影響を与えることがあったのでしょうか。

山本：その前のコレクション（2006年）の翌年からお店を始めました。自分で服を作っても、ショーの時以外は結局のところバイヤーさんが買ってくれない限り誰も見てもらえ

ません。そうした状況はどうなのかな、という思いがありました。であれば、見てもらえる場所を持とう、作った物をすぐ見てもらって、気に入れば買ってもらえる。それでお店をやり始めたところ、お客さんと直接つながりができるようになりました。そうすると、お客さんのための服を一度作ってみたい、という気持ちが湧いてきて、6月のプレゼンテーションでは、お店でやっているようなことをそのままショーとして提案しようと思いました。ファッション・ショーは、私がこういうものを作りました、見てください、買ってください、って一方向的な流れがどうしても強いんです。もちろん、その時発表した服は自分の作品であって、100%お客さん本位ではないのですが…。

KCI：POTTOのプレゼンテーションで強く感じることは、モデルも含め会場にいる人が通常のファッション・ショーに行く人とはまったく違う雰囲気を醸し出していることです。いわゆるファッション好きでもブランドおたくでもなく、「服が好き」というオーラを多くの人が放っている。実際に、山本さんが目指していることに共鳴している人たちが集まっているようで非常に新鮮です。

山本：ショーはいつも雰囲気が良くて、僕自身も嬉しくなります。ありがたいことです。

しかも、自前で全部やっている時の方がさらに雰囲気は良いように思います。

KCI：加えて、山本さんは30年、50年のファッション史の流れをしっかりと押さえながら、意識的なのかどうかかわありませんが、自分の立ち位置がどこにあるのか、どこに置くべきかを念頭に置いて制作してらっしゃいます。美術やデザインの分野なども幅広く勉強されていて、アウトプットされたものにも説得力があります。

そして、現在のデザイナーは、一部かもしれませんが、服に向かうだけでなく国内外の製造現場やその環境も含め、服の生産システムなどにも思いをめぐらしています。ファッションはどうあるべきかを考えているように感じます。

山本：安くて誰でも同じものを着られるファスト・ファッションの方向ではなく、デザインの力で変えていきたい気持ちはあります。うまく言えませんが、伝えたい目的がはっきりあって、それを示すために作っているというより、ぼんやりとした何かがあって、それを探りながら作っています。それは非常に個人的なことですが、結果としてできたものが他人にも影響を与えうる、いろいろな解釈や意見を生み出す、ということに、作ることの大きな可能性を感じています。

その上で、ビジネスのために誰かが大きな不利益を被ることは避けたい。低賃金、児童労働などはもっての外ですが、環境にもできるだけ負荷をかけず持続させていける仕組みでないといけないと思っています。

ファッションが何か、僕自身には答えはありません。いつも考えながら服を作っていく

しかないと思っています。それは、長い時間をかけて、その時代の人たちによって作られていくものなのではないでしょうか。僕自身、死ぬまでずっと服を作りたいし、今あまり服に興味をもてない人でも、たとえば僕の服を見て、「面白い！自分も作りたい！ファッションやりたい！」と興味を持ってくれたら嬉しい。そんな服を作れたら、と思っています。KCI：ありがとうございました。

(聞き手：石関亮、蘆田裕史)

〈図版〉

Fig. 1 山本哲也／POTTO 《Conversation》2006年春夏

Tetsuya Yamamoto / POTTO, Spring/Summer 2006.

Fig. 2 山本哲也／POTTO 《絵になる服》2009年

Tetsuya Yamamoto / POTTO, 2009.

Fig. 3 山本哲也／POTTO 《ワイルドスタイルとか恐山》2011年

Tetsuya Yamamoto / POTTO, 2011.

山本哲也 (やまもとてつや)

1974年、兵庫県生まれ。97年、文化服装学院卒業。2001年、初コレクション。自由で独特の発想で服作りを続け、ショーやインスタレーションなどで発表している。2007年、恵比寿にショップ兼アトリエ兼住居の「POTTO SHOP」をオープン。生活、制作、販売の場とする。2011年、生活・制作活動の拠点を岡山県に移し、2012年春、新しい「POTTO SHOP」をオープンする。

黒河内真衣子／mame

KCI：黒河内さんは、文化服装学院を卒業後、イッセイミヤケでA-POCの企画などを経て、2010年、独立して自身のブランド「mame」を立ち上げました。イッセイミヤケでの経験も含めて、現在の黒河内さんの服作りの姿勢に影響を与えたものはなんでしょうか。

黒河内：昔から服を作るのが夢で、デザイン画は色々描いていました。中学生くらいの時ですが、新聞の社会面にA-POCの前身でもあるイッセイミヤケの《Le Feu》の写真が載っていて、モデルが一つの服に連なって入っているそのデザインに衝撃を受けました。「こういう人が世界にもいるんだ。自分も頑張らなきゃ」と子供ながらに思ったことをずっと覚えていて、もしイッセイミヤケに入れるならA-POCの仕事に携わりたいと考えていました。それが、学校を卒業する時、光栄なことに三宅デザイン事務所に、しかもA-POCのチームに入れて……。

その頃は、藤原大さんがイッセイミヤケのコレクション・ラインを手掛ける前でまだ

A-POC にかかわっていましたし、藤原さんの後任でコレクション・ラインのデザイナーになっている宮前義之さんとも同じチームでした。全部で3年半くらい在籍していましたが、得ることが非常に多く、色々な面で自分が大きく変わったと思う時期でした。しかも、一生さんとも近い場所でお仕事ができ、一緒に福井に和紙を漉きに行ったり、21_21 デザインサイトの「21 世紀人」展の企画にかかわることができたり、服作りではないところでも教えていただくことがたくさんありました。

一生さんは何かを作るときに妥協が一切ない方で、一緒に仕事をしていて大変感銘を受けました。やはりトップとして引っ張っていかなければならいからかもしれませんが、絶対に諦めない、とことん追求する姿勢が常にあって、さまざまなことにも目を配っていて、展示の仕方まで本当に細かく調整されて……。しかも、一生さんが手を加えると「あ、本当に素敵だな」と思えるのが素晴らしかったです。

私のデザインは、例えば、染めた後に刺繍をするとか、1 着の中に色々な要素を取り込む、何かをプラスしていく傾向が以前から強くありました。ですので、就職する時、自分とは対照的なデザインを実践するところに興味を持っていました。一生さんは論理的で、1 枚の生地からシンプルで素敵な服をいかに組み上げるか、という考え方をされていて、当時の自分にはすごく斬新でしたし、自分なりに何をマイナスするか、意識しながら作業することができた本当に大事な3年間でした。

KCI：「mame」のブランドとしてのコンセプトやターゲットとしている年齢層などがあれば教えてください。

黒河内：「現代社会における戦闘服」をブランドのコンセプトとして掲げています。強い表現の言葉なので色々な形で取り上げられる機会が多いのですが、堅苦しい意味ではありません。等身大の、日常での出来事を念頭に置いていて、例えば、働いている中で、仕事の上で戦わなければいけない時があると思います。恋愛している時に戦うかもしれません。もっと些細な日常で、友達と食事に行く時に、これを着よう、と服を選ぶこともあります。この感覚が大事だと思っていて、そうやって着てくれた女性にプラスアルファを感じてもらえる服を目指しています。

ターゲットは、自分と同じ20代後半から30代前半を想定しています。実際の客層は20代後半が多いようです。学生の方もいらっしゃいます。私自身、学校を卒業して、自分で稼いだお金で服を買うようになった時、支払う金額に見合う服とはどういうものかを考えるようになりました。今は、自分が大事にしたいと思うモノづくりをベースにしています。

KCI：「戦闘服」という言葉の強さとは対照的に、「mame」の服はディテールにもこだわっ

た非常に細やかなデザインが特徴的です。実際にデザインをする上でこういったところを重視していますか。

黒河内：服を着る時に、ほんのちょっとしたところから出る女性らしさを大事にしたいと思っています。例えば、Vネックでも直線的にカットせずに、数ミリ程度の曲線をつけることで鎖骨の見え方を柔らかく表現したり、コートの衿を、後ろを抜いているような形で少しだけ立たせてみたり……。コートのシルエットを少しコクーンっぽくしたり、生地に暖かくて柔らか味のある尾州のアンゴラ・ウールを使ったりして、女性らしい丸みを視覚や触覚で表現することもあります。

それから、刺繍やエンブroidアリー・レースはよく使います。チュールや薄いシルクといった華奢で繊細な土台を扱うことが多いので、刺繍自体にも柔らかな触り心地を持たせたくて、通常裏張りする芯材を水溶紙に替えて、刺繍を施した後で水に溶かしています。今、桐生にある刺繍屋さんでしていただいています、1点1点が非常に手の込んだ作業です。

日本のテキスタイル工場は生地表情とか細かな部分にこだわって作っているところが多くて、それまでの固定概念を崩されることがよくあります。例えば、ポリエステル繊維にしても、今は中国や韓国で安価なものが手に入りますが、福井にある高密度のポリエステルを取り扱う工場では、ジョーゼットのしぼの出し方や肌触りが優れていて、今シーズン（2012年春夏）使わせてもらっています。難しい麻の染色や加工についても、研究している方が山形のニッターさんでいらっしゃって、ハイゲージの麻ニットを制作していただきました。非常に薄いニットで、きれいなインナーと合わせて着てもらうと透けて見えます。それでいて、麻らしいしじら感が残っています。

他にも、アクリルと塩化ビニールを編み上げて作ったアクセサリー類をファースト・シーズンから続けて発表しています。「mame」の服はシンプルなものが多いのですが、そこへアクセントとして合わせてもらえれば、と考えています。最初、透明色から始めて、今は白や蛍光色のものも展開しています。

KCI：ファスト・ファッションであったり、若手のデザイナーがよく取り上げるストリート・ファッションやサブカルチャーとは距離を置いて活動されているように思いますが、黒河内さん自身はどのようにお考えでしょうか。

黒河内：ひとつのカルチャーとしてそういう動きは否定しません。勢いの強さであったり、クオリティーとはまた別の形の手づくり感であったり、それぞれの良さもありますから。ですが、それだけになってしまうのは危険だと思っています。

同時に、一生さんや川久保さんたちが作ってきた日本のファッションの歴史もあって、

そこで育まれたものを継承したり、うまく取り込んでいるブランドが少ないのではないかと感じています。これまでの日本のファッション産業を支えてきた職人技や高度な製造技術が20年後も存続できるように、素晴らしいものを伝えられる仕事をしたいという気持ちがあります。品質の高いインポートものと戦っていけるブランドも日本には必要ですし、若い世代でもそういったポジションをしっかり確立していきたいと思っています。

KCI：日本は現代ファッションの歴史に大きな足跡を残しました。産業としても伝統的に技術水準が極めて高いと思います。一方で、日本で独自に発展したストリート・ファッションなどが、メディアへのインパクトも強いたために現代日本のファッションの象徴のようになっています。日本のファッションが世界から注目されるのは喜ばしいことですが、ある側面が強調され過ぎるばかりに、別の優れた側面が見失われてしまうのは残念です。

黒河内：世代のことを考えると、5、6歳下の方々の価値観が、意外にも大きく変わっていて驚きます。そこには、インターネットの普及がやはり大きく影響していると感じています。私の世代は、なかった時代も知っていますし、カルチャーとして使い始めた世代でもあります。新しい視野だと考えることもできますが、例えば、手の込んだ刺繍を見た時に高度な技術を使って手間をかけているからこの価格になっている、という感覚が理解できない世代が出てきている。ファスト・ファッションのブランドのように工賃の安い海外で作らせた刺繍との違いが分からなくなっている状況を考えると非常に悔しい思いがします。

服を10着買った時に、たとえその中の9着がファスト・ファッションのものでも、残り1着だけはとっておきの服にする、ということでもいいと思います。大切なものであれば多少破けても大事にする。そういう感覚はなくて欲しくない。毎シーズン、トレンドが変わる度に買い替えるという考えは好きではありません。これから10年ブランドを続けた時でも、商品に対する見る目を顧客に持ち続けてもらえるように、私たちの世代が微力ながらも質の高いモノづくりを続けることが必要なのではないでしょうか。

KCI：ありがとうございました。

(聞き手：深井晃子、石関亮)

〈図版〉

Fig. 1 黒河内真衣子／mame 2011年春夏

Maiko Kurogouchi / mame, Spring/Summer 2011.

Fig. 2 黒河内真衣子／mame 2012年春夏

Maiko Kurogouchi / mame, Spring/Summer 2012.

黒河内真衣子（くろごうちまいこ）

1985年生まれ。文化服装学院卒業後、株式会社三宅デザイン事務所に入社。2010年、黒河内デザイン事務所設立。

自身のブランド「mame」を立ち上げる。

(※肩書は掲載時のものです)